

平成29年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査-6号)

農林総合研究センター
平成29年6月28日調査

気象経過

<平年対比>

新潟地方気象台は6月21日に「北陸地方は、梅雨入りしたとみられます。」と発表しました。(平年に比べ9日、前年に比べ8日遅い)

【平均気温】

・6月第5半旬は、金沢は並、輪島はかなり低い(平年差:金沢-0.3℃、輪島-1.5℃)

【日照時間】

・6月第5半旬は、金沢、輪島ともかなり多い(平年比:金沢181%、輪島150%)

【降水量】

・6月第5半旬は、金沢、輪島ともに少ない(平年比:金沢61%、輪島64%)

【1ヶ月予報】

6月22日発表の1か月予報(6月24日~7月23日)では、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

生育概況等

【本田の生育】

1. 出穂期

ゆめみづほの出穂期は、加賀地域の平坦部で7月18~22日頃と近年並から3日程度遅く、能登地域(羽咋~中能登)は7月24日頃と近年に比べ3~5日程度遅くなると見込まれる。また、能登地域(奥能登~珠洲)の能登ひかりの出穂期は、7月26~28日頃と近年より3日、前年より9日程度遅くなると見込まれる。

2. 葉齢

コシヒカリの葉齢は、県平均-0.4葉(県平均97%:加賀-0.3葉、能登-0.4葉)となっている。コシヒカリの葉齢展開からみた生育の遅速は、平年に比べ3~4日程度遅いと見込まれる。

3. 草丈

コシヒカリは平年比97%(加賀地域97%、能登地域95%)と加賀地域は平年並、能登地域は平年に比べやや短い。ゆめみづほは近年比84%(加賀地域84%、能登地域85%)といずれの地域も近年に比べ短い。

4. m²当たり茎数

コシヒカリは、平年比112%(加賀地域111%、能登地域113%)と加賀地域、能登地域とも平年に比べやや多い。ゆめみづほは近年比113%(加賀地域112%、能登地域117%)といずれの地域も近年に比べやや多い。

最高分げつ期は、県下の調査地点の内、加賀地域のコシヒカリ、ゆめみづほについては約半数の圃場で達しているが、能登地域については、いずれの品種も達しておらず、いずれの地域も平年及び前年に比べ遅れており、特に能登地域で遅れている。

m²当たり茎数(平年、前年)及び株当たり茎数

コシヒカリ	県平均	587本	(平年比 112% 前年比 114%)	32.4本/株
	加賀	583本	(平年比 111% 前年比 114%)	31.8本/株
	能登	593本	(平年比 113% 前年比 115%)	32.3本/株
ゆめみづほ	県平均	642本	(近年比 115% 前年比 115%)	35.7本/株
	加賀	644本	(近年比 114% 前年比 114%)	36.5本/株
	能登	636本	(近年比 117% 前年比 121%)	34.2本/株
ひやくまん穀	加賀	573本	(移植 5月6日)	32.0本/株
	能登	319本	(移植 5月17日)	16.8本/株

ひやくまん穀の茎数については、移植の早い加賀地域では573本/m²（株当たり32.0本）、移植の遅い能登地域では319本/m²（株当たり16.8本）となっている。

5. 葉色

コシヒカリは平年並の4.2（葉色板値）となっている。

ひやくまん穀は、コシヒカリよりもやや濃く、ゆめみづほ並の4.4（葉色板値）となっている。

【病害虫の発生状況】

雑草地におけるカメムシ類の発生は平年に比べ多く、特に飛翔性カメムシ類が多い。

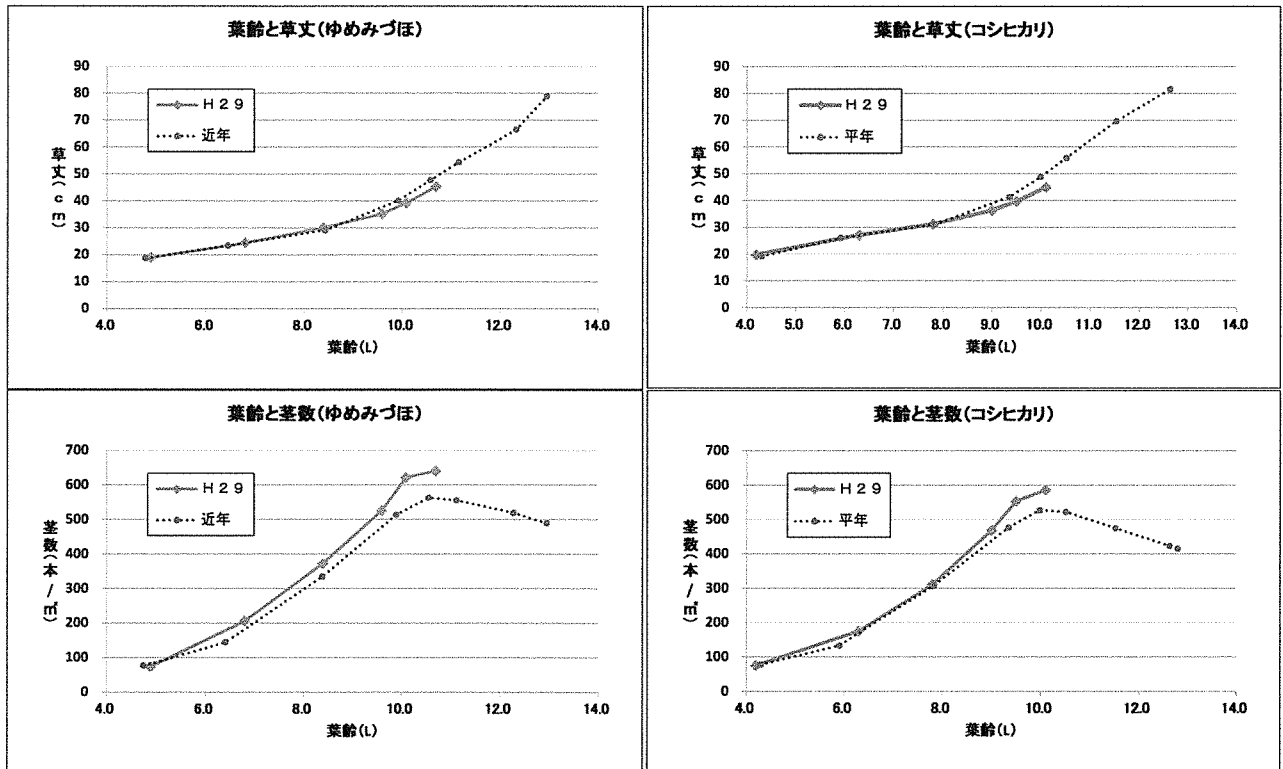
当面の対策

1. 早生の1回目の穂肥は、適期の幼穂長（ゆめみづほ：1～2mm出穂23日前、能登ひかり：2～3mm出穂20日前）を確認し、遅れずに施用する。
ゆめみづほの穂肥については、葉色が濃いほ場（葉色板値4以上）や茎数が650本/m²を超えているほ場では時期は遅らせず施肥量を減らして施用し、2回目は出穂7～10日前に基準量を施用する。
2. コシヒカリは、平年に比べ最高分けつ期が遅れていることから、弱勢分けつの発生が懸念されるため、7月上旬まで中干しを継続し、優良茎を確保し、登熟条件の良い稲体へ誘導する。
また、5月20日以降に移植されたほ場においては、7月第3半旬まで中干しを継続する。
3. 18℃未満の最低気温が予想される場合は、幼穂形成期（出穂前25～15日）では水深10cm以上の深水管理とし、減数分裂期（出穂前15～5日）では可能な限り深水管理とし、不稔籾の発生防止に努める。
4. 穂肥施用後は根の機能を保持し、登熟を向上させるため、間断通水により土壌の飽水状態を保つ。
5. 紋枯病の常発地や前年発生ほ場、茎数の多いほ場では発生に注意し、防除を徹底する。
粉剤での防除適期は、出穂前10～14日である。
6. いもち病（葉いもち）感染好適日が6月25日に県内の広範囲に渡って出現している。
このため、いもち病の箱施葉が行われていないほ場、いもち病の常発地及び葉色の濃いほ場を中心に巡回を行ない、葉いもちの早期発見に努め、発生を認めたら直ちに防除を行う。
7. 斑点米カメムシ類の発生が多くなっているため、生息密度を下げるため、引き続き7月上旬まで生息場所である畦畔や農道の除草を徹底する。除草は、集落など地域全体で一斉に実施すると効果が高い。なお、刈り払った雑草は用排水路に入らないように注意する。

<参考：草丈の伸長および茎数の増加傾向>

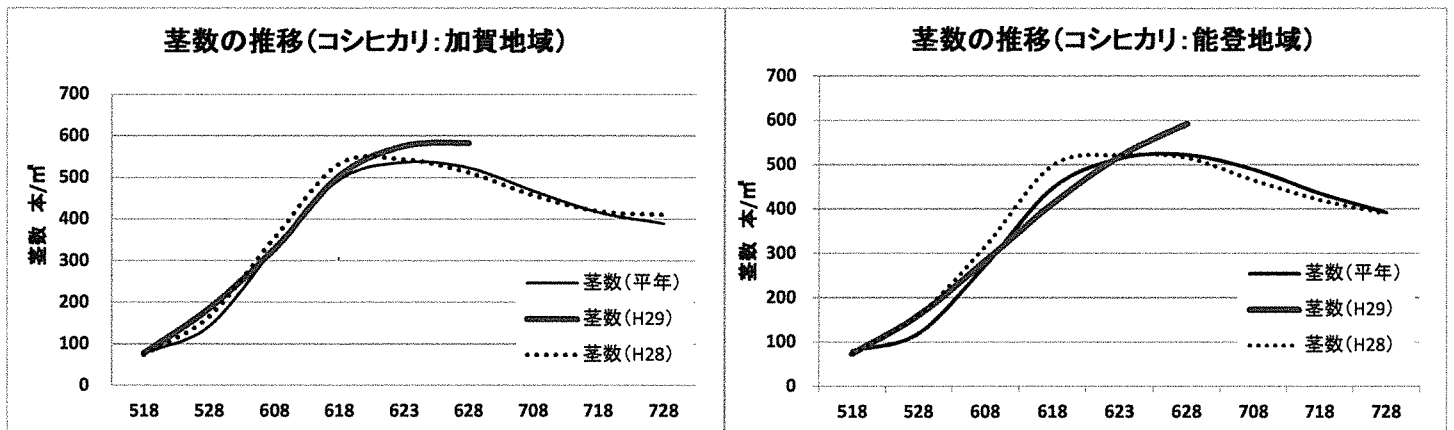
- ・葉齢を基に草丈の伸長および茎数の増加を平年と比較すると、コシヒカリ、ゆめみづほともに草丈は平年に比べやや短くなっている。

茎数については、最高分けつ期の遅れから、コシヒカリ、ゆめみづほとも平年に比べやや多くなっている。

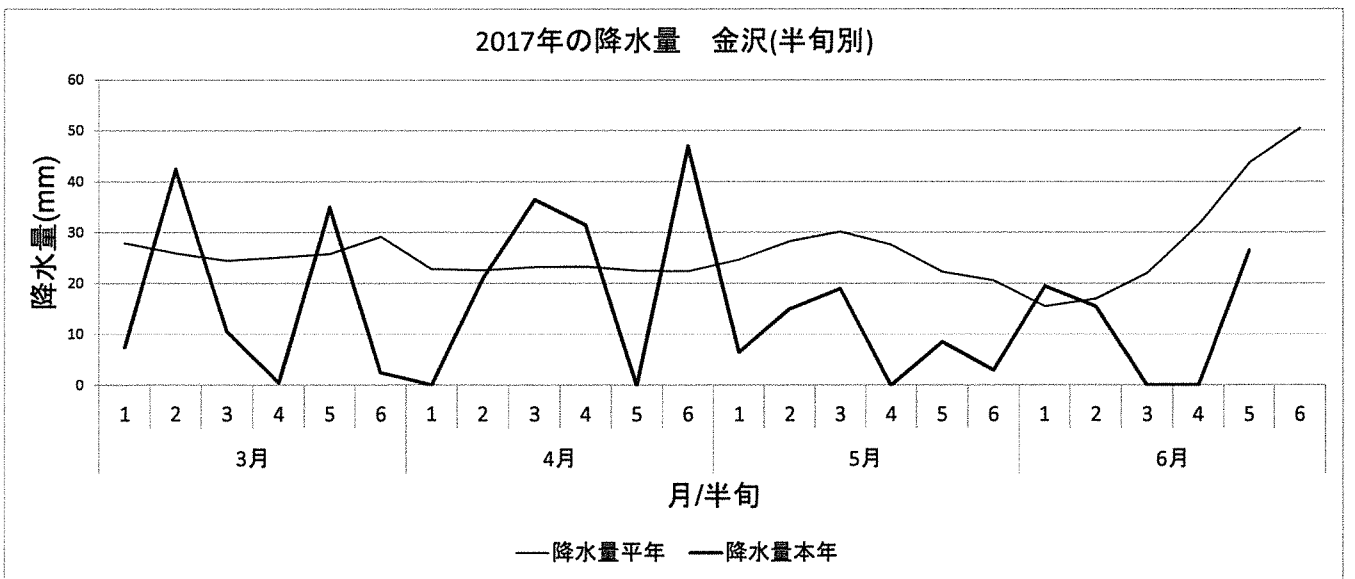
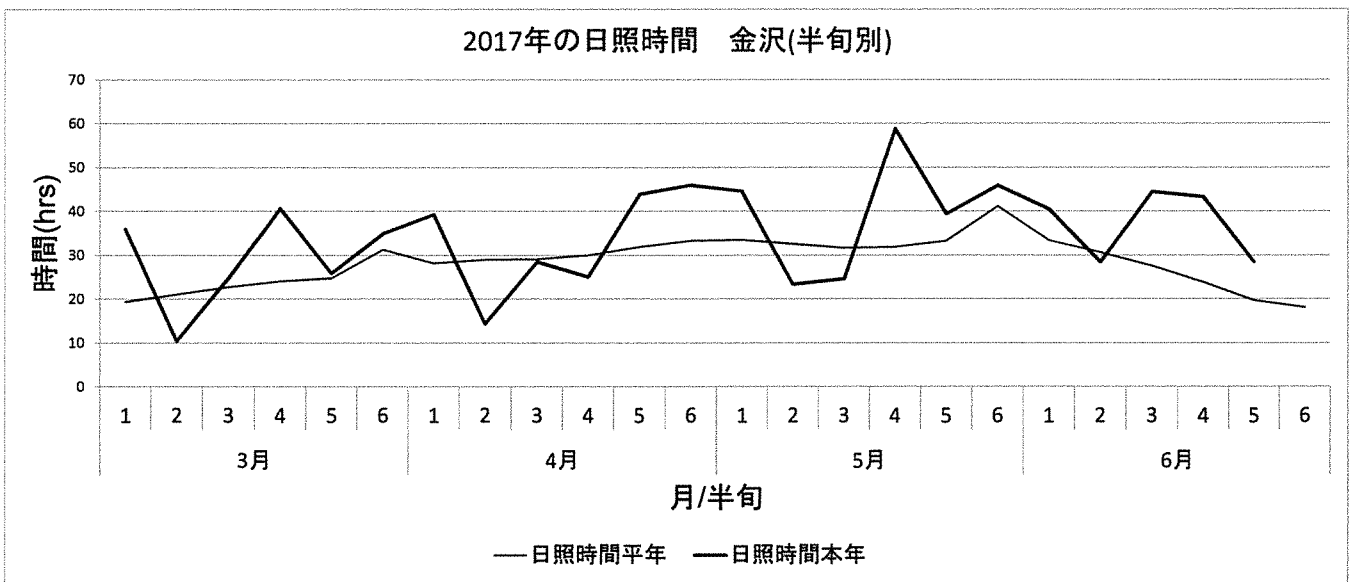
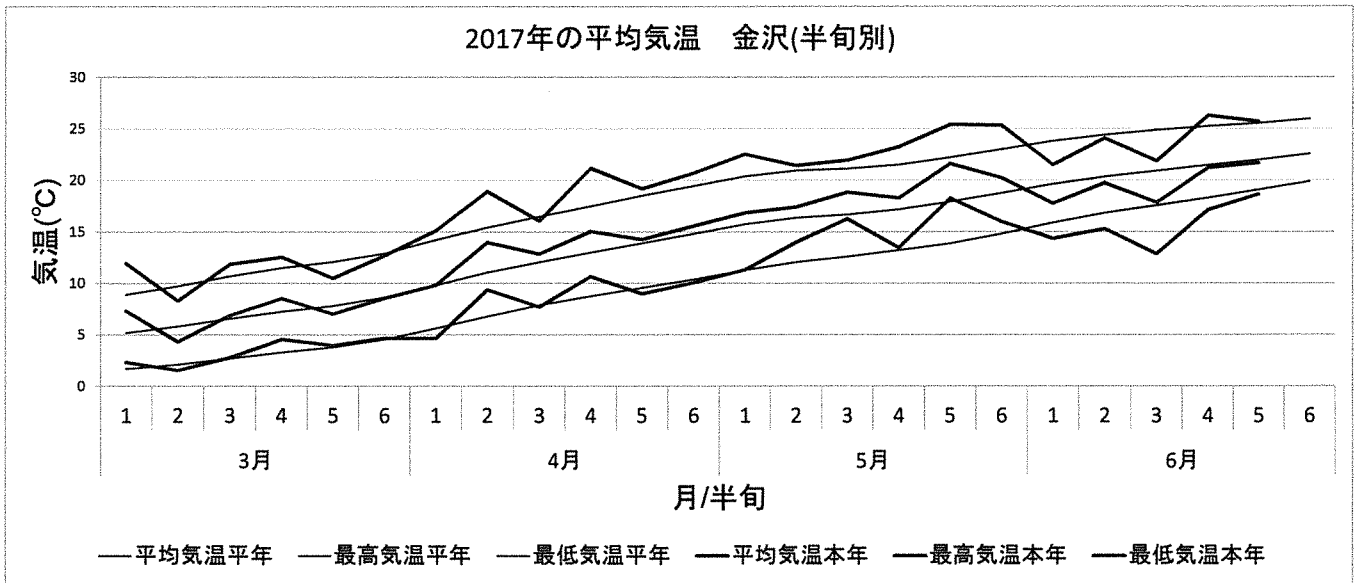


- ・また、調査日を基にコシヒカリの茎数増加を平年及び前年と比較すると、加賀地域、能登地域とも平年および前年に比べやや多くなっている。

また、最高分けつ期については、加賀地域は6月末、能登地域では7月にずれ込むと見込まれ、平年及び前年よりも遅くなる。



気象経過イメージ (金沢気象台)

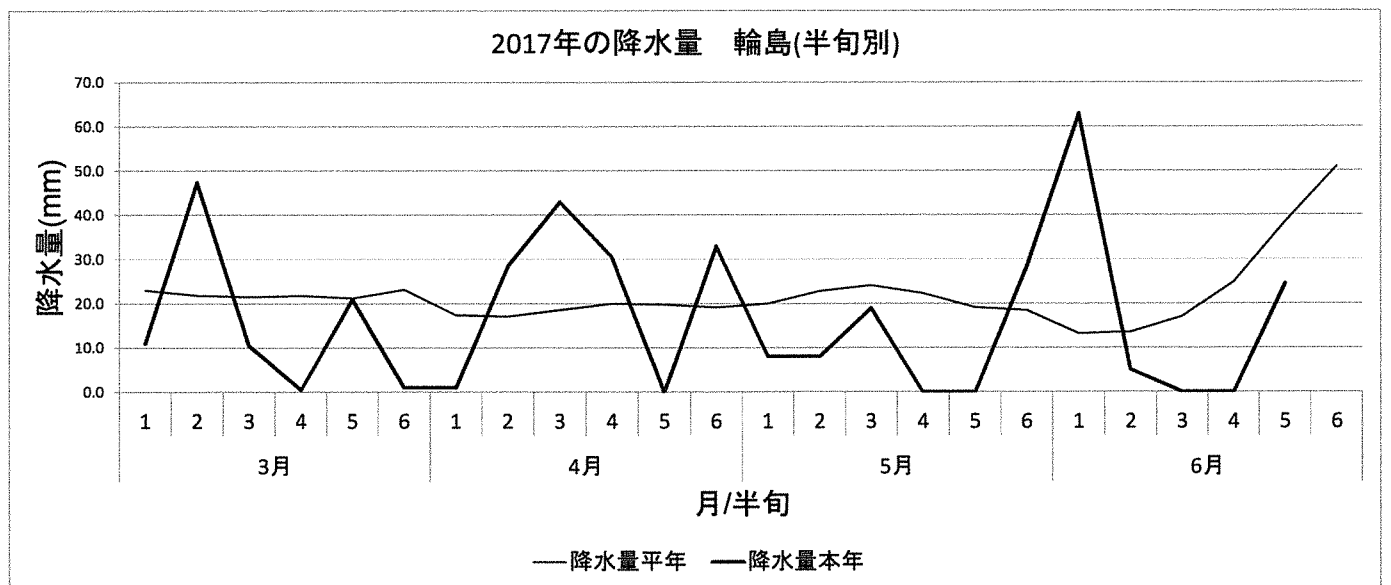
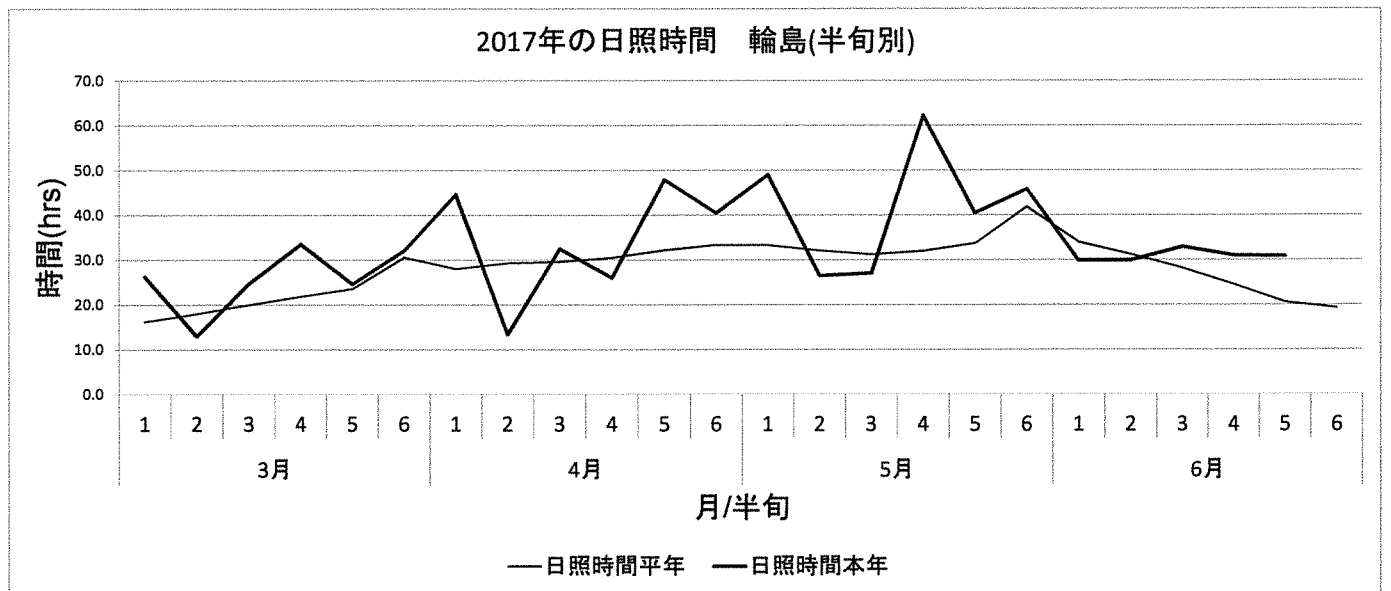
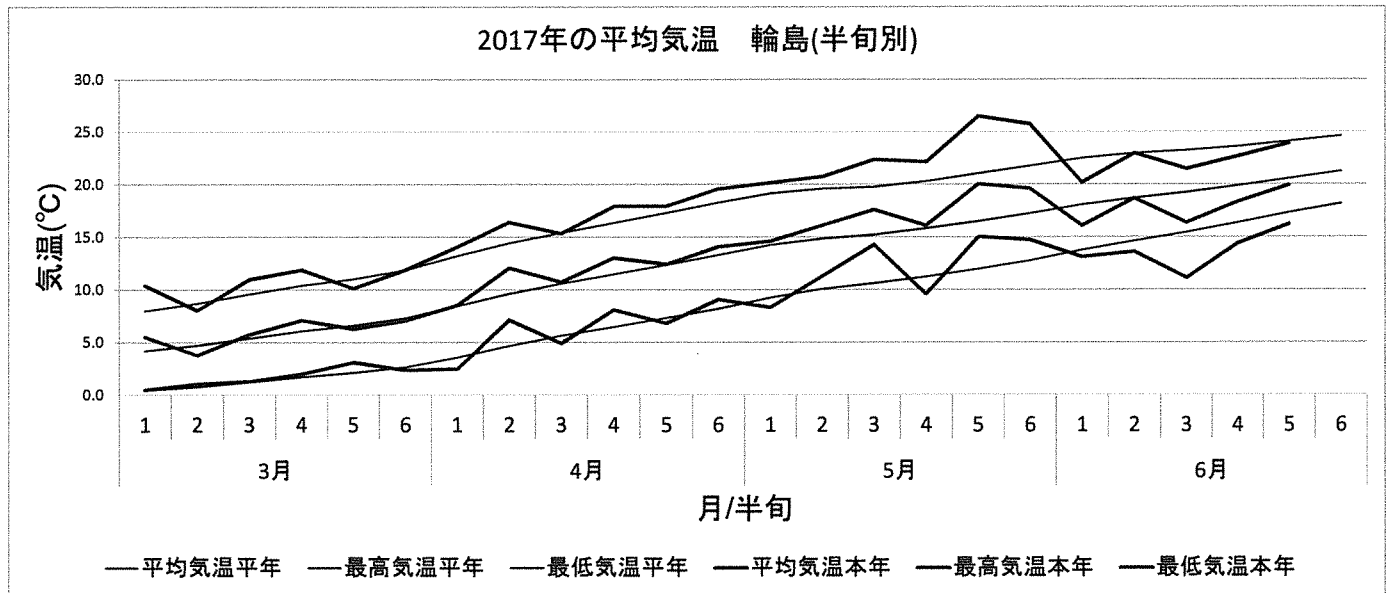


※金沢気象台観測データを基に石川県農業試験場が作成

※平年値は過去30年間(昭和56年~平成22年)の平均値

※降水量・日照時間については、1、3、5、7、8、10、12月の第6半旬は、6日間の合計値となるため、他の半旬より値が大きくなる場合が多い

気象経過イメージ（金沢気象台）



※金沢気象台観測データを基に石川県農業試験場が作成
 ※平年値は過去30年間（昭和56年～平成22年）の平均値
 ※降水量・日照時間については、1、3、5、7、8、10、12月の第6半旬は、6日間の合計値となるため、他の半旬より値が大きくなる場合が多い